

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：幼児教育学科

資格：准教授

氏名：崎山 ゆかり

研究分野	研究内容のキーワード
健康・スポーツ科学 身体発達発育学 子ども学	体育心理学、発達・子育て、ダンス・ムーブメントセラピー、身体的共感、ケステンバーク・ムーブメント・プロフィール
学位	最終学歴
博士（学術）、文学修士	奈良女子大学大学院 人間文化研究科 社会生活環境学専攻 後期博士課程 早期修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 教科体育 子どもを育む幼児体育・運動遊びワークブック（改定版）	2017年3月	昨年度の使用状況を参考に、授業前後の予習復習のための自主課題ページを増補し、さらに学生自身に記録の重要性の自覚を促すために、提出日などを明確化した改訂版を作成した。
2. 教科体育 子どもを育む幼児体育・運動遊びワークブック	2016年3月	10年間の教科体育での指導でまとめた配布資料を踏まえ、授業の進行に合わせて学生が行う授業記録などの記載ページも加えたワークブックを作成。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 幼児及び児童への運動指導	1991年4月1日2007年3月31日	奈良県健康づくりセンター所属の運動指導員として、未就園児の2歳半～のこどもとその保護者を対象にした親子体操、4歳児～小学6年生を対象にしたこども体操教室、3歳児対象の水慣れを目的とした水泳教室などを担当し、幼児及び児童への運動指導業務に従事した。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. ケステンバーク・ムーブメント・プロフィール上位分析家	2015年08月11日～現在	乳幼児の発達上のリズムを基盤とし、精神分析理論に基づく運動分析法であるケステンバーク・ムーブメント・プロフィール（KMP）の上位資格。発達支援などに活用される。理論だけでなく動きの記譜法など全ての教授が可能な資格。
2. ケステンバーク・ムーブメント・プロフィールレベル1（初級）分析家	2014年12月14日	こどもの発達段階の動きやそのリズムに着目した運動分析法の初級の課程を修了。保育者やダンスセラピスト向けの入門レベルを教授できる資格。
3. アメリカダンスセラピー協会認定ダンスセラピー指導者（BC-DMT）	2002年03月	Borad Cerified Dance Movement Therapist ダンスセラピーの専門家として教育とスーパービジョンに携わるための協会認定資格（ADTRより資格領域の変更（RegisteredからCertifiedに伴い名称変更）
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. ダンスコミュニケーション認知症の人とつながる力	共	2014年06月	クリエイツかもがわ	三宅真里、吉村節子編、山口樹子訳、向出章子、貴船恵子、平山波、川岸恵子、大沼幸子、崎山ゆかり、坂本千恵、町田章一他、オーストラリアの認知症のダンスセラピストヘザー・ヒル氏の著作への寄稿として、ダンスムーブメントの現場から「ストレス軽減とコミュニケーションのためのダンス・ムーブメントセラピー」pp. 88-90を執筆
2. ダンスセラピーの理論と実践 からだと心へのヒーリングアート	共	2012年04月29日発行	ジアース教育新社	平井タカネ、大沼幸子、町田章一、松原豊、尾久裕紀、葛西俊治、北島順子、八木ありさ、山中克己 日本ダンス・セラピー協会制作のダンスセラピスト資格取得のための研修講座のテキストとして編著者として関わる。理論編（全10章）1章、実践編（全1

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
3. 新子どもの健康	共	2010年03月	三晃書房	3章) 3章分を担当。米国のダンスセラピストのバイオニアたちの理論と技法(pp. 143-154)、身体的共感(pp. 169-179)、知的障害児・者への実践法(pp. 255-265)や生涯教育(健康)領域の実践法(pp. 299-310)をまとめた。 平井タカネ、西村美佳、上野恭裕、林麗子、成瀬九美、渡部かなえ、岡澤哲子、井上摩紀、河本洋子他 平井タカネ、村岡眞澄、河本洋子編著、平成8年度版の全面改訂で、「保育臨床の視点から見た子どもの動き」の箇所(pp. 35-37)を担当。保育現場で気になる子どもの動きの分析指標などを紹介した。
4. タッチングと心理療法ーダンスセラピーの可能性ー	単	2007年09月	創元社	長年のダンスセラピーの実践から、心理療法においてタッチングが有効であることを示した。安全な枠組を設定することで、タッチングが多様な人々の心身の活性化や他者とのコミュニケーションの促進に寄与することを、理論と実践の両面から検討した。
5. ダンスセラピー入門ーリズム・ふれあい・イメージの療法的機能ー	共	2006年06月	岩崎学術出版社	平井 ダンスの持つセラピューティックな機能に着目し、リズム・ふれあい(タッチ)・イメージの療法的機能について実験データを示すと共に、具体的な技法を紹介。精神障害、知的障害などさまざまな立場の人への実践報告も掲載している。
2 学位論文				
1. 心理療法的機能を活かした身体にふれる技法の創案と展開ーダンス・ムーブメントセラピーにおける実践的研究ー	単	2005年3月	奈良女子大学大学院(人間文化研究科社会生活環境学専攻)	ダンス・ムーブメントセラピーの実践から、身体にふれることを含むアプローチの心理療法的意義を明らかにし、幅広い対象者への応用可能なセッションモデルを提示。そのモデルに沿った実践(精神障害者、重複障害児、中途身体障害者、高齢者)から、他者と実際に身体がふれあうことによる効果について検証した。
3 学術論文				
1. テンションフローリズムにおけるミックスリズムに関する一考察ー身体的共感につながる動きのリズム体験を通してー	単	2017年3月31日	ダンスセラピー研究 Vol. 10 No. 1 pp. 27-36	他者と共に動き、関係性を育むためには、その基本となる動きから生まれるリズムに着目する必要がある。特に乳幼児の運動発達を理解し、その動きのリズムを掘り下げることが重要である。そこで、乳幼児の運動発達を踏まえたケステンバークムーブメントプロフィールの分析カテゴリーのテンションフローリズムを取り上げ、記譜の技法を習得する際に必要な他者への身体的共感に基づくリズムの調律の実践について論じた。
2. ケステンバークムーブメントプロフィールにおけるテンションフロー特性とその応用に関する一考察	単	2017年3月31日	ダンスセラピー研究 Vol. 10 No. 1 pp. 37-35	他者に共感し、関係性を築くためには、他者の共に動くときのかかわり方の運動の質の理解が不可欠である。乳幼児の運動発達の支援につながる運動分析法であるケステンバークムーブメントプロフィールの分析カテゴリーであるテンションフロー特性の分析方法の独自性を取り上げ、汎用化に焦点を当て具体的な活用法について、アメリカの幼稚園での保育者と運動分析家の協働による保育現場での取り組みを例示しながら、その可能性について論考した。
3. ケステンバークムーブメントプロフィール(KMP)における前駆エフォートとエフォートの表現性に関する研究(査読付)	単	2017年1月31日	日本芸術療法学会誌 Vol. 47, No. 2, 125-132.	こどもの運動発達と精神発達段階を基盤とした運動分析法(KMP)の2つの分析カテゴリーに着目し、13か月の女児の動きの分析結果のデータを元に、カテゴリーによる動きの違いや表現される内容の相違について検討した。具体的には各カテゴリーの分析結果から得られた数値を比較して、その意味付けを行った。
4. Kestenberg Movement Profile理解のための動きの実体験に基づく教材研究	単	2016年03月31日	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) Vol. 63 21-29	乳幼児の発達に基づく運動分析法であるKestenberg Movement Profile(KMP)の理解には、理論だけではなく動きの実体験が不可欠である。実際の資格取得のための専門コースの受講体験を踏まえ、日本でKMPを学び理解するために必要な体験を促すための教材作成を試み、指導者が活き活きと運動指導を行う基盤となる動きの体験を引き出すための教材について検討した。
5. ダンスセラピストの立場から見たタッチングと心理療法	単	2013年05月	The Journal of Aromatherapy & Natural Medicine Vol. 22 No. 3 17-21	「タッチング(ふれあい)のメカニズムと有用性」という特集号の中で、心理療法におけるタッチングの禁忌の理論的背景を論じた。さらに、ダンスセラピーにおけるタッチングのとらえ方と、タッチングが奏功した事例、マイナスに働いた事例などを紹介し、セッションで活用できるタッチングを含む具体的なアプローチについて述べた。
6. Kestenberg Movement Profileの記譜における学びの過程と分析対象者への調律に関する検討	共	2012年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学) Vol. 60 63-70	中めぐみ これまでの筆者らのKMPへの取り組みを概観し、動きの分析のための具体的な技法となる動きのリズムの記譜の実態について、2歳女児の日常動作や保護者

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. Kestenberg Movement Profileにおける運動分析用語の解釈に関する検討	共	2010年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）Vol. 58 13-21	とのリズムカルな動きの遊びなどの映像からの事例を元にまとめた。専門家による分析結果を踏まえ、記譜者が分析対象者に調律するための課題について論じた。 中めぐみ 子どもの動きの分析法であるKMPのテンションフローリズムにおける動きの特性やそのイメージをを日本語でわかりやすく表現するため、動きの映像からイメージされる言葉のアンケート調査を実施した。保育者を目指す学生を対象に、異なる運動の質を指導者として引き出すためにイメージするオノマトペについて尋ねた。その結果オノマトペによる叙述が全体の33%を占め、リズム特性を表す用語を規定する際の、一助になることが示唆された。
8. A Study of Ethical Issues of Touching in Dance Therapy	単	2009年04月	Moving On Dance -Movement therapy Association of Australia, 7, No. 3&4 21-26.	オーストラリアのダンスセラピー協会より依頼を受け、過去の論文（ダンスセラピーにおけるふれることについての倫理問題の検討）を再掲することとなり、過去の論文を一部改訂した。第三者が英訳した原稿を校正した。
9. 子どもの動きの評価法に関する基礎的研究—ダンスセラピーにおけるKestenberg Movement Profileを手がかりにして—	単	2009年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学, Vol. 57 19-26.	ダンスセラピーにおける子どもの動きの評価法のKMPに焦点を当て、その理論的基盤の整理を行い、保育現場で指導者が乳幼児と運藤やリズムなどの動きでかかわる際の応用の可能性について論じた。
10. 子どものためのダンスセラピーに関する世界の現状と課題	単	2009年03月	武庫川女子大学 人文・社会科学, 56 : 9-17	アメリカダンスセラピー協会第13回インターナショナルパネルにパネリストとして参加した経験をふまえ、世界14カ国の子どものダンスセラピーの状況をまとめた。さらに筆者自身の保育現場における運動遊び領域の研究から、集団でかかわりあう子どもの遊びとの関連を述べながら、日本の現状と課題について総括した。
11. 非言語的コミュニケーションを支えるダンスセラピー技法の検討	単	2008年03月	武庫川女子大学紀要 人文・社会科学, 55 : 1-8	共通教育科目で実施した「ボディワーク入門」の授業をふまえ、参加学生がコミュニケーションを促進させた要因となるダンスセラピー技法との関連を考察し、実際の体験が学生の自覚できる心身の変化にどのように寄与したかを記録から検討した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. Korean Society for Dance/Movement psychotherapy		2011年03月		Future of Dance/Movement Therapy
2. 学会発表				
1. Body Communication through Japanese Perspectives	単	2016年11月17日	9th Annual International Education and Diversity Forum	Whitworth University で開催された教育フォーラムのワークショップにおいて、日本人の身体文化に基づくコミュニケーションの在り様について、保育現場で実践されている伝承遊びの動きや子ども向けのエアロビクスの動きを取り上げ、MFWI留学中の教育学科の学生たちに動きのデモンストレーションと参加者とのワークをリードした。
2. ケステンバークムーブメントプロフィールにおける前駆エフォートとエフォートの表現性に関する研究	単	2015年11月29日	第47回日本芸術療法学会	乳幼児の運動発達を観察から成り立つKMPの分析カテゴリーの中から、KMP独自の項目である前駆エフォートとラバンの運動分析項目と等しいエフォートに着目し、これらのカテゴリーごとに相対する要素の表現性の違いについて論じ、これらの理解が動きから他者を理解することにつながる重要な観点であることを指摘した。
3. ダンスセラピーのいままでとこれから	共	2015年11月01日	第24回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会 大会特別企画シンポジウム	町田章一 日本におけるダンスセラピーの歩みと今後を議論するシンポジウムで、「これから」を考えるための話題提供のシンポジストとして、設立50周年を迎えたアメリカのダンスセラピーの現状と課題について述べた。
4. ケステンバークムーブメントプロフィール（KMP）を活用した身体的共感をもたらすリズム調律	単	2015年11月01日	第24回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会 実技発表	KMPのピュアリズムの特性の理解を踏まえ、2種類または3種類のピュアリズムの融合を実体験しながら、他者とリズムを通して共感する具体的なアプローチ方法について論じた。
5. A Study on Japanese Onomatopoeias Based on Effort Elements for Classification of Simple and Expressive Movements	単	2015年10月23日	the 50th annual conference of American Dance Therapy Association Research and Poster presentation	先行研究を踏まえ、エフォートを表すオノマトペの分類を試み、エフォート要素を具体的に示すオノマトペの抽出と、その提示方法について検討した。
6. Kestenberg Movement Profileにおける動きのリズムに関する検討—リズムからの非言語コミュニケーションによる子育て支援を目指して—	共	2015年09月20日	日本心理臨床学会第34回秋季大会	Kestenberg Movement Profileの中のリズム性に着目したテンションフローリズム（TFR）に着目し、発達段階ごとのピュアリズムとピュアリズムが組み合わされたミックスリズムをを理解し、これらのリズムを通じた相互交流の在り方について、分析事例を踏まえてその意義をまとめた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. A Study on Recurrence of Movement Quality with Japanese Onomatopoeias Based on Effort Elements	単	2014年11月7日	the 49th annual conference of American Dance Therapy Association Research and Poster presentation	先行研究で抽出されたエフォート要素を表すオノマトペによる動きの再現性について調査した結果、そのままエフォートの要素を含む動作のみで再現されるものと事物などを操作する新たな意味づけをもった動きに分類されることが明らかとなった。
8. Why I Became A Dance/Movement Therapist?	単	2013年10月26日	the 48 annual conference of American Dance Therapy Association, the 19th International Panel	14か国からの代表者のパネルにおいて、日本のパネリストとしてセラピストになったきっかけとその経緯について語り、鼓童の音楽を用いたダンスを行った後ドイツのセラピストとの即興を行った。全パネリストの口頭発表後はフロアの参加者と共に踊るという発表形式で、プレゼンテーションを実施した。
9. 身体的共感におけるリズム性と空間性に関する一考察	単	2013年08月30日	第22回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会	ダンスセラピーにおける不可欠な要素である身体的共感の捉え方の多様性を踏まえ、筋運動感覚レベルでの感情移入 (Kinesthetic Empathy) として位置づけて、リズム性については調律から空間性についてはタッチングから検討し、身体的共感の成立条件を論じた。
10. Communication through Movement with and without Touch	単	2013年06月29日	2013 Korean Dance Movement Association International Conference	韓国ダンスセラピー協会設立20周年記念の国際大会において、他者交流を促進するダンスセラピーの技法であるタッチングに着目し、タッチがある場合とない場合のアプローチの方法を、ワークショップ形式で発表した。
11. 人間粘土遊びを通じた親子の身体表現の在り方	共	2012年5月4日	第65回日本保育学会	崎山ゆかり、水谷孝子 附属幼稚園における親子活動の一環として、親子で粘土と彫刻家になるからだを使った造形遊びを実施した。形を作る遊びを通して、自然発生的に親子のふれあいや対話、時には笑いも生まれ、身体表現を通じた親子のコミュニケーション促進の場となった。また3, 4, 5歳児毎に同様のプログラムを行ったことから、発達段階ごとの検討が今後の課題となった。
12. エフォートに基づくオノマトペのイメージ特性についての検討	単	2012年11月25日	第21回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会	エフォート要素(時間、空間、流れ)に基づくオノマトペをアンケート調査で抽出し、上位2位までのオノマトペを用いた自由歩行を実施した。歩行後、どのようなイメージ歩いたかを調査したところ、もともとのエフォート要素と全て一致するもの、全く一致しないもの、エフォート要素と異なるイメージとが混ざるものに分類された。
13. Applying Dance/Movement Therapy in Early Childhood Education in Japan	単	2012年10月13日	the 47 annual conference of American Dance Therapy Association, the 18th International Panel	アメリカダンスセラピー学会の国際委員会による国際パネルに登壇。 ダンス・ムーブメントセラピーの新たな方向性をテーマに、インド、オーストラリア、エストニア、オランダ、ドイツ、チェコの代表者と共に自国での活動を発表し、議論した。
14. A Pilot Study on Movement Quality of the Japanese Onomatopoeias Based on Effort Elements	単	2012年10月12日	the 47 annual conference of American Dance Therapy Association, Research and Thesis Poster Session	ラバンの運動分析のエフォート要素に基づく日本語のオノマトペについてアンケート調査をした結果を報告し、抽出されたオノマトペの中から、最も標本数の多かった時間の要素のオノマトペに着目し、そのオノマトペのイメージで行った自由歩行の時間と歩幅の実験より、有意に速度に差が見られる一方、歩幅には違いはなかった。
15. Cultural Identity and Collaboration in Dance Therapy	単	2011年10月	the 46 annual conference of American Dance Therapy Association, the 17th International Panel	国際委員会主催のパネルにおいて、アメリカ、韓国、ドイツ、オランダ、ベルギーなど各国のダンスセラピストと共に、自国のダンスセラピーに用いられるダンスの文化的背景とその影響について概説し、ビデオを用いて舞踏の基礎的な動きを紹介した。
16. 動きの質を表わす歩行に関するオノマトペ表現について	単	2011年09月	第20回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会 ポスター発表	ラバンなどの動きの専門用語を用いず、日常の言葉で動きを表現する試みを報告する。歩行動作に関するオノマトペについて、アンケート調査から抽出した言葉と、実際にイメージされる歩行動作とのつながりについて考察する。
17. ダンスセラピストは何をする人か？	共	2011年09月	第20回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会シンポジウム	大沼幸子、荒川香代子、神宮京子 記念学術大会の特別企画のシンポジウムにおけるスピーカーとして、前段の「私の中の痛みに向き合う」というテーマでおこなったワークショップを振り返りながら、ダンスセラピストとしてクライアントと向き合う基本姿勢と心構えについて論じた。
18. 保育者を対象とした豆を使った食育プログラムの試行	共	2011年05月	第64回日本保育学会ポスター発表	北村真理 保育者を対象に豆を用いた食育研修講座を行った。豆のおやつ調理と試食、ビーンバッグの運動遊びの体験後、各保育現場で多様な実践がなされた。食育普及には保育者自身の理解や知識の深化が不可欠と思われた。
19. Ways of Seeing & Making Meaning: East & West (Part 1)	共	2010年09月	the 45 annual conference of American Dance Therapy Association,	Meg H. Chang, Rainbow T. H. Ho, Stacey Hurst, Warren Tepayayone 中国系アメリカ人、香港、台湾、韓国、日本のダン

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
20. ダンスセラピーと男性	共	2010年09月	the 45 annual conference of American Dance Therapy Association, the 16th International Panel	町田章一 大会企画のシンポジウムにおいて、日本ダンスセラピー協会における男性会員の比率や、協会運営にかかわる理事らの現状を報告し、会員における男性比率の現状をアメリカなど海外の現状との比較などをおこなった。
21. ビーンバッグを活用した運動遊びの創案と展開－保育を学ぶ学生の教材としての意義について－	単	2010年05月	第63回日本保育学会ポスター発表	保育を学ぶ学生が、ビーンバッグを用いた運動遊びと新たな遊びを創案した結果、自らの卒業研究課題へとその経験を発展させていった。ビーンバッグは、学生にとって研究のための教材としても発展性があった。
22. 多様な社会におけるダンスセラピーについて	単	2008年10月	the 43rd annual conference of American Dance Therapy Association, the 14th International Panel	第14回の国際委員会のパネルディスカッションにおいて、日本のパネリストとして発表。ダンスセラピーの多様性について、日本のセラピストの活動状況を報告し、その現状と課題について述べた。また自身の実践例として、一般大学生へのダンスセラピー技法を用いたからだコミュニケーションのアプローチについて、写真を交えながら紹介し、フロア参加者との質疑応答を行った。
23. 健康増進運動とダンスセラピーのつながりについて	単	2008年09月	第17回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会	ストレッチ体操やウォーキングなどの基本的な健康増進運動が、コミュニケーションツールとして、ダンスセラピーの場で活かせることに着目し、実技を交えて報告した。
24. 幼児教育専攻学生のからだコミュニケーション	共	2008年05月	第61回日本保育学会自主シンポジウム	平井タカネ、成瀬九美、服部明子、崎山ゆかり 自主シンポジウムにおいて、「からだコミュニケーション」をテーマに、保育者に求められる身体のあり方を複眼的視野から論じる中で、特に保育者養成課程の学生のからだの在り方を報告した。
25. Dance/Movement Therapy for Children in Japan	共	2007年10月	the 42nd annual conference of American Dance Therapy Association, the 13th International Panel	Miriam R. Bergar, Suay Tortora, 他 アメリカ・フィンランド・インド・ドイツ・フランス・エジプト・韓国・アルゼンチン、ギリシアなど世界10ヶ国のダンスセラピストが一同に介し、各国の子どもへのダンスセラピーの実践のその現状についてパネルディスカッションをおこなった。
26. Bridge between physical education for children and dance/movement therapy	単	2007年10月	the 42nd annual conference of American Dance Therapy Association	日本の子どもの運動遊びの要素とダンス・ムーブメントセラピーのグループコミュニケーション促進の共通点を実際のワークと共に体験し、参加者自身の体験を振り返りながら、実際のセラピーが必要な子どもたちへの応用のあり方を論議した。
27. 子どもの運動遊びとダンス・ムーブメントセラピー	単	2007年09月	第16回日本ダンス・セラピー協会学術研究大会	子どもの運動遊びの中にある心理療法的機能に着目し、集団での動きや楽しさの共有や表現的動作の創造を実体験し、ダンス・ムーブメントセラピーとの共有要因を探るワークショップを実施した。
28. 日々を生きるからだコミュニケーション	共	2007年05月	第60回日本保育学会自主シンポジウム	平井タカネ、岡澤哲子、成瀬九美、服部明子、野村雅一 保育現場の大人自身のからだの在り方、また保育者を目指す学生たちのからだの硬さなどの背景には、どのような問題があるかについて、発表者自身の問題意識やその解決に向けての取り組みを発表し、多様な非言語的コミュニケーションの実際について論議した。
3. 総説				
1. ケステンバークムーブメントプロフィール解題のための試論－調律の概念に着目して－ (査読付)	単	2012年3月	ダンスセラピー研究 Vol.6 No.1 8-16	子どもの動きの分析技法であるケステンバークムーブメントプロフィール (KMP)を理解するための基礎知識をまとめたうえで、他者関係を動きの面からとらえる調律の概念に着目して、ダンスセラピストとして必要とされる動きの技術について論じた
4. 芸術 (建築模型等含む) ・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. ダンス・ムーブメントセラピーにおけるケステンバークムーブメントプロフィール (KMP)適用法入門	共	2012年03月	ダンスセラピー研究 Vol.6 No.1 37-59	中めぐみ The Art and Science of Dance/Movement Therapy Life is Dance Chaiklin&Wengrower 編の第13章の全訳。Loman&SossinによるApplying the Kestenber Movement Profile in Dance/Movement Therapy: An Introduction
2. 医療現場に活かすダンス・ムーブメントセラピーの実際 (An Introduction to Medical Dance/Movement Therapy) シャロン・W・グッドル (Sharon W. Goodill) 著	共	2008年1月10日	平井タカネ監修、川岸恵子、坂本麻衣子、成瀬九美、林麗子共訳 創元社 pp.1-274	アメリカの一般的な医療現場におけるダンス・ムーブメントセラピーの実態をまとめた指導者の論文集の翻訳。 2章医療的ダンス・ムーブメントセラピーのための心理学的基礎pp.26-56、 6章家族や介護者のため

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
を共訳。創元社刊。2008年1月刊行。				のダンス・ムーブメントセラピーpp.159-183 担当
6. 研究費の取得状況				
1. 平成29年度科学研究費助成事業 基盤研究C (分担)		2017年4月から4年間		生活環境学部食物栄養学科北村真理准教授の「保育現場における食育の評価基準に関する研究」の分担研究者として、食育との関連から、幼児の体力測定と評価を担当予定
2. 平成 25 年度科学研究費補助金 学内奨励金 新規	単	2013年		ウェアラブルセンサを用いた二者間のリズム調律に関する基礎的研究
3. 平成 23 年度科学研究費補助金 学内奨励金 新規	単	2011年		Kestenberg Movement Profile (KMP) の記譜法に関する基礎的研究

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2006年6月～現在	日本保育学会
2. 2000年～現在	日本心理臨床学会
3. 1992年9月～現在 理事	日本ダンス・セラピー協会
4. 1990年5月～	American Dance Therapy Association
5. 1989年10月～現在 評議員	日本芸術療法学会
6. 1988年3月～現在	日本体育学会